

## 学生教育改革に向けた設備の充実化

### 多彩な学生教育活動に対応できる多目的教室の整備

一般教養棟2階に12室、看護学科棟2階に30室の多目的教室が設けられ、普段は予約制で自主学習、国家試験対策、看護学科臨床実習事後学修等に利用されていますが、医学科、看護学科でのOSCE※1(オスキー)における試験室としても活用できるよう整備しています。多目的教室は防音を強く意識した壁材が使用され、各部屋に2台の録音録画装置と放送設備を備えています。中央監視室において各教室の様子を監視・記録することができ、OSCEの厳正かつ公正な実施が可能となっています。

2021年5月に医師法が改正され、2023年度から共用試験(CBT※2と臨床実習前OSCE)に合格すると医薬(処方箋の発行を除く)を行なうことができる、2025年度からは、共用試験の合格をもって国家試験受験資格とする、ことが定められました(共用試験の公的化)。医学科では、共用試験は今後更に、入学試験や国家試験と同様の厳正かつ公正な実施が求められることとなります。本学の多目的教室設備の充実により、2024年1月に医療系大学間共用試験実施評価機構(CATO)主催の臨床実習前OSCE追再試験の会場として活用される予定です。その他、OSCE以外でも、シミュレータを用いた医療技能トレーニング室やワークショップにおけるグループワーク用の小会議室としての活用が可能です。



新たに設置された厳正かつ公正なOSCEの実施を可能とする中央監視室

※1 OSCE: Objective Structured Clinical Examination (客観的臨床能力試験)  
※2 CBT: Computer Based Testing (知識の修得度を評価する試験)

## ウィズコロナ時代に対応する看護学教育

### ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業採択

長期化する新型コロナウイルス感染症の影響は、看護技術の修得における体験的学習の機会の激減をもたらしました。体験的な学習経験を補うことは喫緊かつ新たな課題であり、かつ厚生労働省が示す技術項目の「卒業時の到達度」の達成に向け、質的にも量的にも確保する必要性が出てきたため、文部科学省令和3年度大学改革推進等補助金「ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」に応募し、採択されました。

この事業では、ウィズコロナ時代に対応すべく、バーチャルリアリティによる教材作成と多彩なシナリオの展開が可能なシミュレータの導入を行いました。前者では、在宅療養者や新生児がいる家庭等、仮想空間を用いて生活環境を再現する視聴覚教材を作成しました。学生は具現化された模擬事例を主体的に観察してアセスメントをすることが可能です。その共有とディスカッションを通じてアセスメント技術や知識の定着、さらには事例の個別性に対する深い理解が期待されます。また後者ではシミュレータの急変時等のシナリオを用いてバイタルサインの観察をはじめとするフィジカルアセスメントと、看護師としての次の行動を考えながら患者さんへの声かけや看護を行う演習が可能です。

こうした教育資料を活用しながら、ウィズコロナ時代においても体験的学習を保証し、看護師としてだけでなく患者等当事者の目線からも状況を把握することや、統合された看護アセスメント能力(メタ認知・思考・判断・身体感覚)とコミュニケーション能力、ディスカッション能力等の修得を目指します。



シミュレーター写真



右: 公衆衛生看護学講座(公衆衛生看護)教授 伊藤美樹子  
左: 臨床看護学講座(精神)教授 河村奈美子

## 世界に羽ばたく大学

### 研究医養成コース

2011年度から研究医枠での入学定員の増員を申請、2012年度には文部科学省GP※「基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成」のモデル事業へも積極的に応募し、いずれも選定されました。GP期間終了後は、大学独自の取組みの「研究医養成コース」として「入門研究医コース」・「登録研究医コース」を通じて科学的探究心の涵養を特に重視した教育を行ってきました。

2021年度、研究医養成コースは、学部教育部門研究医養成検討専門委員会のもと、【医学・医療の発展のための医学研究の必要性を十分に理解し、批判的思考も身につけながら、学術・研究活動に関与する】ことを目的としてアウトカムを設定しました。また、学部在学中に一定の要件を満たすことでアウトカムを達成したことを認定するため、「研究医養成コース」の修了証を交付することとして、研究医養成コースの教育課程を大幅に改訂を行いました。

※GP: 大学等が実施する優れた取組み「Good practice」

### 研究医を目指す学生へ

医師臨床教育センター 基礎研究医プログラム研修医 景山裕介 (前列左から2人目)



私が研究医養成コースに登録したきっかけは指導教員からのすすめです。2017年に学士編入する以前は、ジョンズホプキンス大学で基礎研究に従事しており、入学後もその経験を活かして遠山理事の教室で研究を行っていました。滋賀医科大学では、京都大学や名古屋市立大学と連携した研究に携わることができ、実験手法も含め共同プロジェクトの構想立ち上げや進め方など、遠山理事から包括的な指導を受けました。この4年間で研究プロジェクトをゼロから立ちあげ学術論文にまとめる経験をし、研究者として成長できたと考えております。

研究医養成コース在籍中に、第19回国際神経病理学会口頭発表、滋賀医科大学学生表彰受賞3回、SUMS symposium受賞4回、日本脳科学会奨励賞受賞、原著論文2本発表、博士号取得(論文博士)等の業績を挙げることができました。医学部の学業があるなかで、このような業績を挙げることができたのも、遠山理事をはじめとする神経難病研究センターの諸先生方のご指導の賜物と存じます。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

滋賀医科大学の研究に興味を持っている学生に、メッセージとして以下の言葉を贈りたいと思います。

**在学中は成果のことは考えず研究に取り組んでください。周りと協力しながら仕事を進める経験は何ものにも代えがたい経験になります。結果がでなくて苦しいこともあります。仲間と一緒に乗り越えられるので頑張ってください。**